

りを収めた冊子)にも、神の名による皆殺しの話がある。過越祭のセーデル(儀式)——神がモーゼとイスラエル族を他人が住んでる国へ行かせ、そこを思い通りに所有させたことを祝う儀式——が、大多数のユダヤ人にとって、絶対的に重要なものではないのは、もちろんである。それは単なる一文学作品で、戦争遂行マニュアルではない。けれども、狂信的メシア信仰の新潮流がそれを利用する可能性は十分にある。事実、一九九五年にはイツハク・ラビンが暗殺され、二〇一五年には十代のパレスチナ少年を焼き殺した事件、さらに両親と四歳の幼児を焼き殺した事件が起きている。^(原註11) 新法相アイエレット・シャケドも同じような思想の持ち主だが、これまでのところイスラエルに抵抗して殉死したパレスチナ人だけにその思想を適用しているようだ。それでも、殉死したパレスチナ人の家族について「息子の後を追わせるべきである。これこそ正しい処置であろう。邪悪な蛇を育てた家を焼却したのと同じように、親、兄弟姉妹、親族を全部消滅させるべきだ。さもないと次々と新しい蛇が誕生する」と公言した。⁽²⁾ それは今のところ将来への警告というレベルにとどまっている。しかし、これまで見てきたように、一八八二年以降常に聖書が破壊と虐殺と剥奪の正当化に使われてきた歴史がある。建国初期、つまり一九四八年から一九六七年までの間は、聖書を利用する傾向がやや緩和されたがそれは主流派労働党シオニズムについて言えることであつて、シオニズム運動右翼は相変わらず聖書を利用して、パレスチナ人を人間以下の獣、ユダヤ民族にとつての永遠の敵と表現して

いた。一九六七年戦争で西岸地区とガザ回廊を占領してからは、そのシオニズム右翼であるメシアの原理主義的ユダヤ教が急成長し、国家宗教党(MAFDAL)を形成、幻想を具体的現実とする機会を得た。^(原註12) 彼らは、政府の認可・不認可に関係なく、新たな占領地の至る所に入植地を作つた。彼らはパレスチナ領の内側にいくつものユダヤ人生活空間を作り、それを拠点にして、あたかもパレスチナ全土が自らの所有地であるかのように振る舞い始めた。^(原註13)

ポスト一九六七年入植運動で最も過激なグツシュ・エムニームは、イスラエル軍の西岸地区・ガザ回廊支配から生じる特殊な状況に便乗して、乱暴狼藉のライセンスを聖書の名において得たかのように、文字通り好き放題に暴れた。イスラエルの法律は占領地に適用されなかつた。占領地は軍政によつて統治されたが、その軍政による規制は入植者に適用されなかつた。つまり、多くの点で、入植者はイスラエルの法律からも占領地の軍政規制からも免責されたのである。彼らはヘブロンや東エルサレムのパレスチナ人居住地の真ん中に強引に移住し、パレスチナ人が栽培するオリーブの樹を根こそぎ引き抜き、畑を焼き払い、家屋を襲い、パレスチナ人を殴打するなど、乱暴の限りを尽くした。それらの行為はすべて「エレッツ・イスラエル」(イスラエルの地)を取り返すという神聖な使命として正当化された。

入植者たちのこの無茶苦茶な聖書メッセージの解釈が適用されたのは占領地だけではなかつた。彼らはイスラエル内のアッカ、ヤッファ、ラムラのようなユダヤ人・パレスチナ人混住市

の中に突入して、長年にわたって辛うじて成立してきた生活様式をかき乱した。一九六七年以前のイスラエル（グリーンライン内のイスラエル）内のこれらの敏感な地域へ入植者運動が入っていくことは、ユダヤ人国家とパレスチナ系マイノリティ国民の間に緊張しながらもなんとか成立してきた微妙な関係を破壊、悪化させることを意味する。

シオニストが聖書の規定する聖地を求める理由の最後のものは、迫害、とりわけホロコーストの迫害を受けた、世界のユダヤ人が安心して住める安住の地の確保であった。^{（訳註16）}もしそれが本当だとしても、聖書の中の地図を利用して先住パレスチナ人を追い出すのではない方法があつたはずである。マハトマ・ガンジーやネルソン・マンデラなどかなり多くの著名人がそういう提案をした。彼らはパレスチナ人を追い出すのでなく、パレスチナ人に懇願して、先住民と共存する形で迫害されたユダヤ人のための安住地を作るべきだと提案した。しかし、シオニズム運動はそのような提案を異端として一蹴した。

ユダヤ人哲学者マルティン・ブーバー^{（訳註17）}が、シオニズム事業を支援してほしいとマハトマ・ガンジーに頼んだとき、ガンジーは、先住民と共存する形の入植と先住民を駆逐する形の入植とは大きな違いがある、と言った。一九三八年にブーバーはベン・グリオンから、世界で倫理的に著名な人物からシオニズム支援の言葉を取りつけてほしいと依頼されたのである。とりわけ反帝国主義非暴力民族解放運動の指導者ガンジーからの支持が有益だと考えたベン・グリオンは、ガンジーがブーバーに敬意を抱いていることに着目して、ブーバーに依頼したのであつた。ガンジーのパレスチナとユダヤ人問題に関する重要な見解は、一九三八年一月一日の『ハリジャン』に社説として掲載された。彼の『ハリジャン』社説は人気があり、広く読まれていた。ちょうどパレスチナ人が英国の親シオニズム政策に抗議して反乱を起こしている時期であつた。社説の書き出しには、何世紀にもわたつて非人間的扱いを受け迫害されてきたユダヤ民族に対する心からの同情が表明されていた。しかし、彼は次のように付言した。

同情によって正義を曇らせることはできない。ユダヤ人の民族郷土を求める声は私の心に訴えるものがない。彼らは聖書と、執拗なパレスチナ帰還という民族的願望により他者の土地での民族郷土設立を正当化する。しかし、自分が生まれ暮らしている国を自分の郷土とする民族はいくらでもいる。なぜ彼らも同じようにしないのか？²²

このようにガンジーは政治的シオニズムの基本論理を疑問視し、「聖書のパレスチナは現実のパレスチナではない」ことを指摘して、約束の地にユダヤ人国を樹立するという思想を否定した。つまり、シオニズム事業の政治的理由と宗教的理由の両方を否定したのである。そのうえ、英国政府がシオニズム事業を支援していることが、ガンジーの心をいつそうシオニズムか

ら遠ざけた。彼はパレスチナが誰のものかを明確に認識していた。

英国が英国人のものであり、フランスがフランス人のものであるのと同じように、パレスチナはアラブ人のものである。アラブ人をパレスチナから追い出しユダヤ人を送り込むうとするのは間違っており、人道に反することである……パレスチナを全面的または部分的にユダヤ人ホームにするために誇り高いアラブ人を抑圧するのは、明らかに人道に反する犯罪である。

ガンジーのパレスチナ問題への対応には、倫理面から政治的リアリズムまで含めて幾層もの意味が込められていた。興味深いのは、彼自身が宗教と政治の不可分性を固く信じていたにもかかわらず、シオニズムの文化的・宗教的民族主義を一貫して厳しく批判したことだ。彼は民族国家樹立を宗教で正当化することになつた共感を示さなかつた。ブーバーはガンジーの意見に対してシオニズムを正当化する立論で対応したが、ガンジーはもうそういう議論にはうんざりしており、やがて両者間の文通は途絶えていった。

シオニズムは迫害されるユダヤ人の救済を主張しているが、現実面から見て、彼らの立場は、可能な限り先住民を減らして可能な限り多くのパレスチナの地を獲得する欲望と規定できた。

幻想に酔っていない世俗派ユダヤ人学者も、古代の曖昧な神の約束を現代の現実に即して翻訳するという「科学的」努力を行っていた。こういう試みはすでに英国委任統治下のユダヤ人コミュニティの歴史家ベン・ツィオン・デイナブルグ（デイヌール）が着手していて、一九四八年の建国以降は多くの歴史家がそれを受け継ぎ、集中的に行われた。その最終的な産物は、第一章で紹介したイスラエル外務省のウェブサイトからの引用文に表現されている。一九三〇年代にデイヌールが行っていたことは、彼の後継者と同じく、ローマ時代以後のパレスチナにユダヤ人が住んでいたことを科学的に証明することであつた。

そんなことはわかりきつたことで、誰も疑うものはいなかつた。それどころか、十八世紀のパレスチナに住んでいたユダヤ人は、十九世紀後半の正統派ユダヤ教徒と同じく、ユダヤ人国という発想に対して否定的だつた。そういう歴史的事実は、二十世紀にはばつきり切り捨てられた。デイヌールとその同僚たちは、十八世紀のパレスチナのユダヤ人人口は二%だつたという統計を用いて、聖書に記述されている神の約束と近代シオニストのパレスチナ獲得という要求の妥当性を「証明」したのである。これが標準的歴史として受容されるようになった。英国の著名な歴史学教授の一人であるマーティン・ギルバート卿が『アラブ・イスラエル紛争地』(The Atlas of the Arab-Israeli Conflict) という本を書いた。これはケンブリッジ大学出版局から出版され、版を重ねた。紛争の歴史を聖書時代から辿り、もともとパレスチナはユダヤ王国で、

sapientia 55
サピエンティア

Ten Myths About Israel

イスラエルに関する 十の神話

Ilan Pappé

イラン・パペ [著]

脇浜義明 [訳]



法政大学出版局